仏教文化公開講座講演録

大乗仏教のエッセンスと浄土真宗

相馬一意

皆さん、こんにちは。私は相馬一意（そうまかずい）と申します。どうぞよろしくお願いいたします。ここで非常勤講師を九年間務めた経験がありますが、久しぶりにこの礼拝室に入りました。非常に懐かしい気がいたします。

森田眞円先生とは特別なご縁がありまして、講演依頼をどうしても断り切れないということでやってまいりましたが、内容のある講演をする力はない人間です。ただ今ご紹介いただきましたように、私は、現在は真宗の僧侶で寺院の住職をしておりますが、専攻は仏教学で、大乗仏教の成立過程を研究課題としました。大学時代は勉強不十分でしたので、龍谷大学大学院に入学して、まじめに勉強しようと思い、梵語、すなわちサンスクリット語を一所懸命学び、そのサンスクリット語文献を使って、大乗仏教の初期の思想を明らかにしようとしたのです。ですから、その時代に研究したことがらから話を始めたいと思います。

Ⅰ．大乗仏教のエッセンス

講演の総合タイトルは、「大乗仏教のエッセンスと浄土真宗」としています。そのうち、前半のテーマが「大乗仏教のエッセンス」ということで、私の若かりし頃の研究テーマに関わるものです。用意した項目は六種で、レジュメに示したとおりです。それを休憩時間までお話する予定です。どうぞお聞きください。

一、前提としての大乗の時間観念と空間論

最初は、「前提としての大乗の時間観念と空間論」ということです。

仏教はインドで興起しましたので、インド人のものの考え方・捉え方を大きく反映しています。その点、狭い列島に住んでいる日本人の考え方とは、ものの捉え方が大きく違っています。あとの話にも関連しますので、まずは、仏教の時間観念と空間的な理解の仕方というものを出しておきました。

a．の「劫（こう）」という単位ですが、インドの梵語で「カルパ」、これを音訳して劫です。一番基本になる時間の単位です。辞書の最初にあるような説明をいたしますと、カルパという時間は、縦横（たてよこ）四方が四十里（しじゅうり）の金剛石（ダイヤモンド）があって、―四十里に四キロをかけて、「四×四〇＝一六〇」で、百六十キロ四方などと訳すと、ものすごく大きいですね。この『註釈版聖典』をつくった本願寺の聖典編纂委員会に所属していたとき、最初は「百六十キロ四方のダイヤモンド」などと訳していましたので、「何それ？」と聞き返し、訂正したことがありました―

「里」は中国の里であって、日本の里ではありません。中国の里は時代によって変わりますが、四百メートルから五百メートルの間ですから、四十里に四百メートルをかければ、十六キロメートルとなります。そういう四十里四方（十六キロ四方）のダイヤモンドがあり、その上に百年に一度鳥が飛んでくる。鳥は、ダイヤモンドの上で羽を休めて、また飛びあがってゆく。そういうふうにして、何度も何度も繰り返していると、四十里四方のダイヤモンドがすり減ってなくなるときが来ます。そのダイヤモンドがなくなるまでの時間が、「一カルパ＝一劫」なのです。

現在、地球ができて約六十億年。この六十億年で四十里四方のダイヤモンドがすり減ってなくなるでしょうか。これでは少し大げさすぎると思ったのか、別の経典を見ますと、「三年に一度鳥が飛んでくる」と記されているものもあります。三年に一度にしたからとて、あまり違いはないように感じます。このように説明された「カルパ」は、長大な時間の単位ですが、これが最大のというわけではありません。いわば最小の時間の観念として、それを何倍も何千倍も何万倍もしたような時間観念の中でものごとを捉えてゆくのです。

b．の「〈三阿僧祇（百大）劫〉という長大な修行時間」の項をご覧ください。大乗仏教が展開して、懸命に煩悩を断じつつ修行して、仏のさとりが得られる期間をいうときに、仏典に出てくる期間が三阿僧祇（あそうぎ）劫です。「百大」という字が入っている場合とない場合とがありますが、いずれにしても三阿僧祇劫は変わりません。阿僧祇の原語は「アサンキヤ」、それを阿僧祇と中国人が音訳いたしました。

日本のＧＤＰを六百兆円にするとか、そんなことできるわけがないとかいうときの「兆」というのがあります。その兆の上は何でしょうか。その次の数の位をご存じですか。そう、「京（けい）」ですね。あまり私たちの生活には関係ありませんが、この頃スーパーコンピュータの話でよく知られるようになりました。一、十、百、千、万、十万、百万、千万、一億、十億……、一兆、十兆……、一京、十京……と、指を折って桁を数えていって、六十番目

に出てくる桁が、阿僧祇（アサンキヤ）というものです。こんなものを考えると頭が痛くなりそうですが、仏教の辞書には、六十番目の桁を「阿僧祇」というとあります。すなわち、十の五十九乗倍の数です。

この十の五十九乗倍の数の劫が「阿僧祇劫」です。四十里四方のダイヤモンドが、鳥が羽を休めたり飛びあがったりして、摩擦して消えてなくなる時間が劫でした。この劫の十の五十九乗倍の時間が阿僧祇劫で、さらにそれを三倍したのが三阿僧祇劫です。想像を絶する長いながい時間であることが理解できましたね。

こういう長い年月の間、生まれ変わり死に変わりして、生まれては死に死んでは生まれることを繰り返しつつ、仏道修行を続けて煩悩を断じていったならば、仏のさとりが得られるというのです。私なら、それでは仏のさとりなど得られないということかと結論づけるのですが、インド人の頭はそうではありません。それだけの年数を修行してゆけばさとりが得られる、そこに素晴らしいさとりの境地が開かれると語ってゆくのです。

まったくすごい時間観念ですね。こうした観念の下で仏教は考えられているのです。

c. の項目を見てください。今度は、空間的な観念で「須弥山世界（閻浮提）と三千大千世界」です。「三千大千世界」は、皆さんも言葉を聞いたことがあると思います。浄土真宗では『仏説阿弥陀経』という経典があり、手頃な長さなので、法事等によく唱えられています。そこに三千大千世界と、何度も繰り返して出てきますね。これがどういう意味であるかということです。

インド人の考えた天体で「須弥山世界」というものがあります。須弥は、「スメール」という原語を、ただ漢字に写したもので、「ス」は「素晴らしい、非常にすごい」、「メール」は「山」です。訳せば、「妙高」となります。日本であちこちにある、妙高山とよばれる高い山は、ここから来ています。

奈良県辺りでは、「弥山」という山があるのをご存じの方がいらっしゃるでしょう。そこは山伏さんの修行の道

場となっています。私は、山伏にまじって修行した経験がありますが、弥山という山名に喜んで、「阿弥陀如来が祭られているのか、変な山やな」と口走ったことがありました。そのとき、「おまえはアホか。須弥山の〈須〉を略しているもので、阿弥陀の弥ではないわい」と叱られたことがございました。

地球というか、天体の一番中心に高くそびえている四角柱の山が須弥山です。それを何重にも山脈が囲んでいて、さらにその外を大海が囲んでいます。その外海中の四方に「四大洲（しだいしゅう）」とよばれる大陸があって、南側に、インドの大陸をかたどったような大陸があり、「南瞻部洲（なんせんぶしゅう）（ジャンブー・ドヴィーパ）」、または、「瞻部洲・閻浮提」といいます。

あとの説明を都合で省略しますが、こうした須弥山を中心とした全体の天体を一つ考えるということです。これが仏教の世界観の単位で、「一小世界」というのです。すなわち、一須弥山世界ですが、これを念頭に置いていただいて話を続けることにいたしましょう。

インドでは、この須弥山世界が世界観の一つの単位になっています。サイズの話は、今はやめておきますが、この天体の真ん中にそびえ立つ須弥山という山の中腹を、太陽も月も回っているといいます。太陽がこちら側に来ているときには裏側に月が行き、月がこちらに来ているときには反対側に太陽が行っているのです。私たちの世界では、西の空に太陽も月も見えるときがありますから、そういうときはどう説明するのか、少し曖昧ですね。こういうアバウトな部分があるのですが、太陽も月も含めて、須弥山世界が成り立っています。

もう亡くなられました。私も少しご縁をいただいた京都大学の梶山雄一という有名な仏教の先生は、「太陽と月が回っているのだから、須弥山世界は、太陽系全部にあたる」と語られていました。そうすると、非常に話が大きくなりますが、私は、一桁ランクを下げて、地球一つ程度の天体を「一須弥山世界」として考えてみたいと思いま

す。

須弥山世界、それを千倍したのが小千世界で、それをまた千倍にしたのが二千世界、または中千世界です。この中千世界（二千世界）は、千倍したものの千倍ですから、二千世界とはありましても、須弥山世界の二千倍ではなく、千の二乗倍個の大きさ、広さですから誤解してはなりません。「千×千＝百万」で、須弥山世界百万個分です。三千大千世界とは、三千世界といいまた大千世界というものをまとめた表現で、中千世界を千倍したもの、すなわち小世界を千の三乗倍したものですから、その十億個分にあたります。

例えば、須弥山世界（一小世界）を私のように地球一つと考えれば、小千世界は太陽系全体ぐらいにあたります。そうしますと、中千世界は、銀河系宇宙ぐらいに相当します。三千大千世界は、ですから、宇宙の全体を指すことになります。

こうした広大な世界、三千大千世界をいくつも考えて、その一つひとつの三千大千世界が一仏（如来）の教化する範囲と考えるのが仏教です。まったくもって、広大極まりない世界観であると申せましょう。

皆さん、亡くなったら浄土にゆく予定ですか、地獄にゆく予定ですか。ここにお見えの方は、大抵浄土へ生まれてゆくのでしょう。浄土に生まれれば阿弥陀仏に会える。そういうところが浄土である、と考えてそれで十分なのですが、この話の続きでいいますと、では、浄土の広さはどれほどのものか、ということになります。浄土は、ここに生まれてくる人がどれほど居ても、決していっぱいにならない、無限の広さを持った世界であるといいます。こういうイメージができるのが三千大千世界ですね。

仏の世界は、西方には極楽世界があり、東の方には、薬師如来の浄瑠璃（じょうるり）という世界があるし、さらには、阿閦（あしゅく）如来の妙喜世界がありますが、そのいろんな仏の世界が三千大千世界一つと思っていただければ結構です。

要するに、時間観念も空間観念も、仏教の考え方は私たちのものとはだいぶ開きがあります。私たちの日常の狭い次元でものごとを考えると、話がだんだん合わなくなってくるということです。以上を前書きにして、それでは、講演の本論に入ってゆくことにいたしましょう。

二、仏教のめざすところは「さとり」

最初は、a・の「煩悩を断じつくして仏陀（ぶっだ）となる（迷いを転じてさとり＝成仏をめざす）」という項目です。

仏教は、お金がたまる、一億円の宝くじが当たるとか、私のガンが治る、どうにもならない息子が何とか出世するというような、現実的な願いを完成させるためにあるのではありません。さとりをめざすのが仏教です。

けれども、そのさとりが簡単に得られるようにはなっていません。私たちには煩悩というさとりを妨げる心持ちが具わっていて、これは「八万四千の煩悩」といわれるように、非常に数多くあるのです。皆さん方で、煩悩がほとんどないという人は居ないと思います。もしいらっしゃれば仏さまに近い存在ということですが、なかなかそうはまいりませんね。

つい最近、東日本大震災という大地震がございました。が、話はこれについてではありません。もう二十年以上になりましょうか、ここ関西で、阪神大震災という大災害があったときのことです。私は、あのときに大山崎町の隣、大阪府の島本町というところに住んでいました。自身は直接の被害を受けなかったのですが、被害を受けた人が周りに大勢居ましたから、そのときに経験した、義捐金拠出に関わっての話です。

ポケットから出し得たのは五万円でした。五万円では足りないと思いましたから、目の前にいた、家内・上の

娘・下の娘の三人にいいました。「お年玉がまだ残っているやろう。どうや、三人で五万円出してくれないか」と。OKが出ました。三人の五万円と私の五万円で、合わせて十万円です。住宅の下の方の田んぼの中を下りてゆきますと郵便局がありますから、早速に郵便局へゆき、義捐金を十万円出して、はんこを「ボン」ともらって帰ってきました。

いいことをしたつもりでおりました。その当時は、日本赤十字社からは何の挨拶もありませんでした。あたりまえですね。でも、そういう状態で一週間ほど経ちますと、私に、「義捐金を十万円も出したのに、頂きましたとか、ありがとうとか、電話の一つもなければ葉書もない。日本赤十字社も水くさいな」というような心が持ちあがってきました。自分は義捐金を出させていただいて、「それが人のために使ってもらえるなら、それはとてもよいことだ」とは素直に思えないのです。「赤十字社は水くさいな」などというケチくさい心がなくならないのです。

私は、人の前で仏教学の講義をしています。そういうとき、「布施」という行を説明して、本来の意味は「捨てる」というのだから、自分が出したものに対して、「使いかたが悪い」とか「与えたものを有意義に使わなければならない」などと、布施者がクレームをつける権利はない。あるいは、布施は、「私が、あの人にこれをあげた」と、手柄顔に思うようなものは本当の布施ではなく、「三輪清浄の布施」といって、施者と受者と施物との三種に執着（しゅうじゃく）しないのが本物だ、などと教えたりしています。それが、たかが十万円。「たかが」というのは、失礼な言い方かもしれませんが、それで私の命がなくなるような切実なお金ではないという意味です。

こういうことを教えていて、そういう人間が、十万円の義捐金で、他から感謝されたいと思う心はお粗末ですよね。まったく情けないと痛切に反省いたしました。ところが、これが真実の反省にはなっていなかったのです。

その当時は、半分は西本願寺の職員という身分でもあり、本願寺の内部での義捐金募集が何度もあって、その都

度千円とか二千円くらいを出していました。そういうとき、『本願寺新報』（本願寺出版社）にこんな記事が載ったのです。「尊いお志、二万円お寄せくださった方」というタイトルで、寄付者の名前が羅列されています。次の号を見ると、今度は「尊いお志、三万円お寄せくださった方」と、前号より少し大きな字で名前が書かれていました。その次はというと、「尊いお志五万円」として、もっと大きな活字で出ていたのです。近頃は、こういう形の記事はあまり見かけませんが、当時はこういう記事が実際にあったのです。

その「五万円」を見た途端に、私は、「しまった。俺は、赤十字社に金を出すべきではなかった。本願寺に出すべきであった。本願寺なら五万円でこれだけの大きさで名前を書いてくれる。私は十万円だから……」と、このあたりまで思った記憶があります。こうして気づかせていただきました、何と浅はかな心だ、強く反省したはずではなかったのか。あの反省はどこにいってしまったのか。捨てるという意味の布施だから手柄顔にいうのとは違うのだなどと、自分では分かっているつもりではいても、こうしたみっともない心がなくならないのが私たちなのだ、と。

いかがですか。こんなクダラナイ心とは無縁な方がいらっしゃいますか。私とほとんど変わらない心の方が強いですか。煩悩は、一回なくし得たと思っても、そう簡単に断じつくすことができるものではありません。それを最大限に数えて、「八万四千の煩悩」といったり、「三阿僧祇百大劫」もの長いながい年月をかけないと断じつくすことができないというわけです。

二番b．は、その三阿僧祇劫という長い年月にわたる修行の段階を示したものです。詳しい説明は省かせていただきますが、四十一位とか五十二位とかいう、まことに長大な修行段階が考えられているということです。そのゴール、最終的に獲得する境地がさとりで、大乗仏教では「阿褥多羅三藐三菩提（あのくたらさんみやくさんぼだい）」と申します。何のことやらさっ

ぱり分かりませんが、漢語に訳しますと、「無上正等覚」「無上等正覚」といいます。この上ない、すなわち最高の仏の正しいさとり、といった意味です。原語は、「アヌッタラサンミャクサンボーディ」というので、このように音訳されています。お寺の長男坊に生まれた私は、寒かろうと暑かろうと、本堂で父親の後ろに正座させられて、内容が理解できないお経を唱えさせられました。「阿褥多羅三藐三菩提」と何回も繰り返して、『阿弥陀経』は終になります。意味が分からないながら、これが来ると、ああそろそろ終だと喜んだものでした。それが、大学院に入って梵語を学ぶようになって、やっとその意味が理解できました。

少しまとめましょう。要するに、煩悩を断じつくすにはまことに長い年月をかけねばならない。その間が修行期間というわけで、三阿僧祇百大劫もかかる。その長大な修行の階位を、あるいは四十一位でいう場合と五十二位で語ったりする。その修行の完成が仏教の目的とするさとりで、阿褥多羅三藐三菩提と称するのです。獲得が極めて困難なゴールであることを、修行年月の長さによって思ってみてください。

ところが、c・をご覧ください。ここにはそれと逆のような言葉、観念・考え方を示しています。「煩悩即菩提」、「生死即涅槃」、「娑婆即浄土」、似たような意味合いの三つの表現を紹介しておきました。

煩悩がすなわち菩提、さとりにほかならない。「生死」というのは迷いの命のことです。生死、迷いの世界がすなわち涅槃、さとりの世界にほかならない。「娑婆」というのは、この私たちの苦しみの世界です。娑婆世界は、「サハー」という原語を漢字に写したものです。この語は非常にポピュラーになっていますね。『広辞苑』（岩波書店）で娑婆世界を引くと、「この現実の苦しみの世界」という説明はもちろん出ていますが、二番目か三番目に、まるきり逆の「自由な世界」という意味でも出ています。自由な世界とは、お分かりですね、刑務所や軍隊等に入れられていて、自由を奪われた人から見れば、娑婆世界が自由な世界に見えるということです。ですから、娑婆と

いうのはあまりいい意味の言葉ではありません。「しゃばに出る」という言葉が、自由になるという意味で使われたりしますが、これはそう見えるだけのこと。あくまで間違った使い方です。私たちの世界は、本当は自由でも何でもなくて、苦しみに堪えなければならない世界（これが正しい娑婆の意味で、堪忍土（かんにんど）というのが正しい翻訳語です）でしかありません。

煩悩を持った、皆さんや私が生きている世界ですから、毎日の新聞を見ると、面白くない記事ばかりです。人を殺したとかだましたという、あってはならないことだとは思いますが、それがあってあたりまえの世界でもあります。

ところが、煩悩がすなわちさとり、菩提である。迷いの世界、生死がすなわちさとりの世界、涅槃である。娑婆、この苦しみの世界こそが浄土である。先の「即」の字で結ばれた三つの表現は、こうした意味になります。まったくの矛盾概念が結局は同じものだという意味は、いかように理解すべきなのでしょうか。

高校生か大学生の時代に読んだＳＦの話です。今日の出だしの、時間や空間の観念を思い出してください。光のスピードで何万年も進んでも到達できないような遠大な距離にある天体にむかっています。通常では、夫婦でロケットに乗っているとして、彼らが生きている間には到達できないので、ロケットの飛行中に子孫を産み育て、その子孫同士がまた結婚して、さらに子孫を育てて、生まれては死に、死んでは産みを何度も何度も繰り返して、やっと目的地に到達するような距離です。が、ＳＦ小説は、そういう宇宙を舞台に成り立っていて、その「時間や空間を折り曲げる」ことで、少しの時間で巨大な距離を飛行できることになっています。宇宙空間を折り曲げるなどということは、表現は簡単ですが、でも意味はよく分かりません。宇宙空間を折り曲げて、何万光年かあるというこちらの端から向こう側に瞬時に移動する。今日の私の話では、三阿僧祇劫かかるところを、空間を折り曲げるよう

にして、即座にそこへ到達する、というようなことでしょうか。多分うそのたぐいでしょうが、こんなSF小説がありました。

もちろん、もっと高尚な意義づけがなされているのでしょうが、娑婆即浄土、煩悩即菩提、生死即涅槃というのが、大乗仏教の発達した観念です。最初は、八万四千の煩悩を断ずる非常に難しい修行を重ねてさとりを得るものとしながら、最終的には、特別の理論をもって、それが簡単に達成できるような教理に変化しているということです。こうした論理構造の必然性を、皆さんに分かる次元の表現をもって説明することが私にはできません。それで、こういう観念が出てきたことを紹介するのみなのですが、即の論理といいますか、矛盾概念の同一視といいますか、こうした観念が大乗仏教の後期には展開してきた、そんなことを少し思っていただければと思います。

三、大乗仏教の基本的な観念としての縁起説

それでは三番目の項目に入ります。a・として「龍樹の無自性・空・縁起説」と出しておきました。大乗仏教は、「縁起」という教説を大事な思想として強調しました。本願寺派総合研究所の編集に関わる実践運動のパンフレット『ごえん』、この小冊子を見ると、縁起が、丁寧に分かりやすく解説されています。これが、大乗仏教の流れの中にある浄土真宗の教えにおいても、当然に、基本的な観念になっているということを強調しておきたいと思います。

縁起の意味を、皆さん、お分かりですか。今朝、出がけに犬のふんを踏んづけてしまったから縁起が悪いとか、このところ、どういうわけか続けて蛇の夢を見たから縁起がよい、というような使われ方をしますが、これは正し

い使用法とは思われません。このレジュメに示していますとおり、龍樹菩薩の教えた縁起説は、「無自性・空・縁起」というような意味です。

無自性というのは、ものには決まった本性はないということです。ある人間をつかまえて、親切な人だといい、あるいは意地の悪い人だという。ある女性を見て、美人だとか不美人だとかいう。金に汚いでもいいし、頭が悪いとかでもいいし、人間の性格をいろいろと決めつけて断言して考えがちですが、本当は、ものはそういうように固定的な本性を持っていないということです。相対的に、他と比較したうえで、そのもののあり方が一応決まってくるだけなのです。ある一定の長さの線を考えてください。これ自体が長いとか短いと決まったものではなく、ほかと比較して、これより長いものを横に持ってくると「短い」となるし、これより短いものを持ってくれば長くもなるということです。よくいわれますように、一人の人間が、夫になったり父になったり、あるいはまた兄や弟になったりします。これが無自性（固定的な本性はない）ということです。

これを言いかえて、「空」といいます。空っぽという意味ではなくて、先の無自性という意味で、決まった実体・本性がないから、条件次第でどうにでも変わるということを空といい、また縁起というのです。

a. の項目に示しました漢文の句をご覧ください。右の「無自性・空・縁起」を教えて龍樹は偈に詠っています。

因縁所生法　我説即是空　亦為是仮名　亦是中道義

因縁所生の法を、我、すなはち是空と説く。また是を仮名と為す。また是中道の義なり。

これは、龍樹の著作として有名な『中論』の第二十四章「観四諦品」の第十八番目の偈です。『中論』を読んだことのある人はここにはあまりいらっしゃらないと思いますが、この句を読んで理解したら、人の前で大きな顔をして、私は『中論』を読んだ、といって構わないでしょう。それほど『中論』の名所中の名所というべきものです。

ここに「中道の義」という言葉が出ています。この中道の義を取って、『中論』と名づけられているのですが、この「中道」という語は、ここにたった一度だけしか用いられていないものですから。

因縁所生の法、あらゆるものは、精神的なものも物質的なものも、それを作り上げている原因や条件、すなわち因縁があって成り立っている。このように、ものは因縁次第で変化するもので、固定的な実体を持っていないから、それを、空と説くのだという。空は空っぽではありません。いろんな原因や条件次第でどのようにも変化するということです。今までどんな人生を送って来たにしても、仮に、私の講演を聞いて人間が入れ替わったという人がおれば、それは、私の話、ここの礼拝堂という場所、あるいはこういう講演会に誘ってくれた友人の存在、こういういろんな条件下での覚醒と申せましょう。これが因縁所生とか衆縁所生とかいう内容ですが、こうしてものが諸条件によって成り立ってくるのを空というし、また、それを「仮名」ともいうのです。仮名とは、仮の名前という意味ですが、諸条件下で仮に成り立っているものですから、そのものの本質を指し示した名ではないという意味が込められています。そして、こういうあり方にあることを「中道」と表現しているのです。

公明党という政党は、この頃はあまり用いないようですが、以前は「中道政党」といっていました。あれはどういう意味でしょう。共産党のように左寄りの考えでもないし、右側の自民党や右翼の考えでもない、多分、中間のという意味で名乗っていたのでしょう。でも、私はこの中道の本来の意味を知っていましたから、そういう意味はないと少し不思議に思っていました。中道は、右でもない左でもない真ん中という意味ではありません。因縁所生・空・仮名という意味と同意であること、しっかりと認識してください。ものは他との比較、条件次第で変わるということを、空といい縁起といい、また仮名といいます。そういう意味です。

笑い話を少しいたしましょうか。私の名前、相馬一意は、親がつけた名前の発音で「そうまかずい」と申します。

でも、本願寺で僧侶の資格を取ると法名を音読みにしますから、釈一意（しゃくいちい）と称します。このついでに、「そうまいちい」とも読み、そのようにルビしたりしていました。『中論』を読んでから、名前は所詮は仮名だからと考えたためです。「先生の本当の名前はどっちですか」と私を問い詰める人もおりましたが、名前など仮名ですから、どちらでもお好きな方をどうぞ、などと得意がっていました。そしたら、この間、アメリカからお叱りを受けました。「あなたの著作には二つのルビがなされている。多分同一人物だとは思うが、ばらばらでは混乱が生じるから、どちらかに統一せよ」と。それでこの頃こういうふうにいたしました。「相馬」と姓をつけたときは、俗名ということで「かずい」と発音し、僧侶名で「釈」をつけたときは「いちい」と音読します。これからどうぞよろしく。

もう一つ名前の話です。下の娘が高校生の三年生のとき、同学年のインドネシア人のホームステイを一年間受け入れたことがありました。その女の子の名前は、ディアン・マリー・インタンサリといいました。彼女を連れて市役所に外国人登録に行ったことがありました。「ファーストネーム」、「ミドルネーム」、「ファミリーネーム」と書きいれる欄があって、黙って見ていたら、順に、「ディアン」「マリー」「インタンサリ」と記入していました。で、何となく彼女の姓はインタンサリというのだと思い込んでおりました。あるとき、お父さんの名前は?、お母さんの名前は?、という話になって、どうもこの三人に共通の語、私が姓と思ったものがないので、私が問い詰めました。「お前ナ、登録のとき、ファーストネーム欄に〈ディアン〉と書き、ファミリーネーム欄に〈インタンサリ〉と入れたろう。あれが姓ではないのか」と。そしたら即座にディアンが反論してきました。「日本人は、日本人の名があたりまえと思っているから、誰でも姓と名前とに分かれていて、アメリカ人のように、また、ミドルネームを持っている人がいると考える。しかし私は、〈ディアン・マリー・インタンサリ〉と三つに切って発音しているけど、インドネシアは、一つの名前で個人を称するので、名前と姓という区別はない。日本人は、姓と名前とを分け

たがるし、役所もそういう書類形式になっているから、私の名はうまい具合に三つに分かれていたので、それを上から順に書いただけだ」と。面白い話だと思いませんか。名は体を表す、という言い方もありますが、先の『中論』からすれば、名前は所詮は仮名、「正義」という名の人物が正義の使者であるわけもなく、「真理」さんという名の女性がすべて真理を体現しているはずもありません。

何やら横道にそれた気もいたしますが、仮名ということで、こんなことを考えたり、日本人の名前に対するこだわりのようなものに思いをはせた経験がある、というたわいない話です。

予定の時間が来たようです。話は途中で切れますが、ここで小休止といたします。

四、菩薩という存在（大乗仏教の修行者）

第二部の話に進む前に、第一部の予定項目のうち、レジュメの4と5について、少しばかりお話しておきたいと思います。

まず申し上げたいことは、大乗仏教の修行者を「菩薩」とよぶということです。修行者が、いわゆる初期仏教の声聞というようなあり方とは異なって、菩薩という名前で語られます。これにも長い修行期間がありますので、入門したてのものから、もう仏陀に近い存在まで、いろいろある。ということで、菩薩に関する観念を、b・c・d・と挙げておきました。語句だけ横目でにらんでおいてください。

e・についてだけ少し解説いたします。菩薩という修行者は、次の項目にありますように、六波羅蜜行を実践してさとりをめざしている存在ですが、その菩提薩埵と音訳される原語「ボーディサットヴァ」を解釈するにあたり、

二通りの説があります。「ボーディ」というのは、「さとりの智慧」という意味です。菩提はすでに私の話の中に出てきていますね。そして、「サットヴァ」というのは、普通は、「衆生（しゅじょう）」と訳され、命ある者という言葉ですので、「さとりの智慧をめざして修行している、頑張っている命ある者」というのが、菩薩の意義第一説です。

しかし、いつでもこの意味で用いられるかといえば、決してそうではありません。「サットヴァ」という単語は、「勇気」とか、「決してひるまない心」という意味もありますので、これによれば、「さとりに向かって修行していて、どれほど長かろうと、いかに困難であろうとも、決してひるまない心を持って励んでいる者」という意味になります。辞書を引くと、「さとりをめざして頑張っている衆生」という方の意味は必ず出ていますが、こちらの方は、あまり示されてはいません。ですが、こちらも非常に重要で、無視できない解釈ですので、ここで念を押しているのです。

曇鸞の『往生論註』を見ますと、

仏道を求むる衆生、勇猛（ゆうみょう）の健志（ごんし）有るが故に菩提薩埵と名づく。

と、明らかに後者の解釈が示されていますし、チベット語で、この菩薩を訳して「チャンチュブ・センパー」といいますが、「チャンチュブ」というのは菩提にあたり、さとりの智慧と訳して間違いないにしても、「センパー」は、「勇気」とか「勇猛心」とかにあたる言葉ですから、これまた、菩薩の意義第二説によっています。

ですから、私はこの頃口癖のように申しています。菩薩を解釈して、ナントカの一つ覚えで、すぐ「さとりをめざして修行している衆生」というてはアカン。曇鸞の『論註』を読め、と。こうして、何があろうとも、「俺はやめた」などと、めげて中途で目的を投げ出す心なくして、最終的な目的の達成まで、どんな困難があろうとも突き進み続ける存在こそが菩薩である、と強調しています。

五、菩薩の基本理念・根本精神

菩薩の六波羅蜜行とは、「布施」「持戒」「忍辱」「精進」「禅定」「智慧」です。詳しい説明は省きますが、布施というのは、先ほども触れました、相手の望むものを何でも与えて、惜しんで自分のところで握りこむことはないという利他の精神です。持戒とは、戒律を守るということです。が、単に決められた戒律を保つことばかりではなくして、「摂善法戒」というのも入ります。あらゆる善法を修め取る、良いことは必ずするということです。また、「摂衆生戒」というのもある。あらゆる命ある者を助ける行動を取ることです。こうした内容を考えると、人のためにつくす＝利他という精神がここにも入っています。（その他の項目は説明省略、興味のある向きは辞書をお引きください）

このような実践項目を通じて、大乗仏教の菩薩には利他の精神が強調されるということです。b・の項をご覧いただきますと、「自利利他円満」と出しています。自分の利益、さとりをめざしている菩薩ではありますが、そのためには、利他行、他人に利益を与える行が必須であるというわけです。また、「自未得度先度他」といいます。「自ら未だ度を得ずして、先に他を度す」と読みます。「度」というのは向こう岸に渡ること、すなわちさとりのこと。自己のさとりをめざして頑張っている存在であるにもかかわらず、自身のさとり獲得を後回しにして、他をさとらせる活動に従事する。この「自利利他円満」とか「自未得度先度他」という言葉の中に、利他行が強調されていて、これが菩薩の基本理念・根本精神であることを深く心にいい聞かせてください。

大乗の修行者、菩薩のもう一つの特徴として、利他、他のためにつくすときに、自己の積んできた功徳を、他に

回し向けるという作用が語られます。「回向（パリナーマ）」ということですね。「願以此功徳　平等施一切　同発菩提心　往生安楽国」を私たちは回向句とよんでいますが、「此の功徳をもって平等に一切に施し」と訓ずる部分を注視してください。自分が苦労して獲得した功徳、それを他の人に回し向けて施す、これが回向の語義です。

時間の都合でこの辺で切り上げますが、こういうことで、大乗の修行者、菩薩の大きな特徴は、利他と回向ということです。第二部へのキーワードとしてご記憶願います。

II．浄土真宗の受け止め方

二枚目のレジュメをご覧ください。いよいよ第二部の話に入ります。残り四十五分ですか、頑張りたいと思います。レジュメに1．～6．と番号しているのは、第一部の「大乗仏教のエッセンス」の番号と対応しています。細項目のa．とかb．とかいうのは、単に順番を示しているだけで、対応してはおりません。

第一は、時間論、空間論に関わるものです。浄土真宗でも、あるいは浄土教の経典でも、大乗仏教ですので、先ほどの仏教の時間論、空間論をそのまま受けついでいるということです。

a．の項を読みます。「五劫思惟」、「十劫正覚」、「無央数劫」、「兆載永劫」。みな『大経』に出る「劫」を使った語です。「無央数劫」や「兆載永劫」を現代語に訳した経験がありますが、訳に関わった若い者から年配の者まで全員で議論しましたが、なかなか議論は決着しませんでした。「むちゃくちゃ長い年月」とでも訳すほかはないと、そのくらいしか表現の仕様がないと笑いあったものです。「むちゃくちゃ長い年月」では少し下品ですので、

現代語版聖典を見てみますと、「計り知れないほど長い年月」となっています。これが上品な訳かどうかよく分かりませんが、いずれにしても、同じようなことをいっているだけです。

「五劫思惟」とは、分かりますよね、法蔵菩薩（阿弥陀仏の修行者時代の名）が四十八願をたてる前に、私たち凡夫を間違いなく救うには、いかなる願をおこすべきかと、考えに考えを深めて検討した年月をいうものです。それを「五劫」と語っています。「十劫正覚」というのは、「現にまします阿弥陀如来という存在が、さとりを得て阿弥陀如来という仏になりたもうたのは、今から十劫の昔である」と語るときに出てきます。その次の「無央数劫」は、前に説明しました「阿僧祇劫」を翻訳したものです。

最後の「兆載永劫」とは、法蔵菩薩が修行を重ねた時間をいうものです。「兆」も「載」も数の単位でありまして、「兆載」というのは、兆と載を、足すのではなく、かけあわすことで、兆×載という無限大に近いほどの数ができますが、それに、例の「劫（カルパ）」をかけた年月が兆載永劫です。マァ、半永久的に長い年月といえましょうから、先ほどのように、「むちゃくちゃ長い年月」とでも訳すほかはないでしょう。

ということで、真宗や浄土教においても、大乗仏教の時間観念を受けついでいるのは間違いのないところです。

こんどはb. の空間論。「三千大千世界」という語は『大経』や『小経』に数多く出ています。「二百一十億の諸仏の刹土（せつど）」というのもあります。経典を読むと、朝食前のわずかな時間に、諸仏の国土にゆきその諸仏を供養して帰ってくる、などと述べられていますが、浄土にあるものには、そうした他の国土・仏土との間で瞬間的に移動できる能力が具えられている、というわけです。

他方の仏土、別の世界の仏土という場合には、それが、他の別の三千大千世界であるという意味です。先ほど説明しましたように、三千大千世界は、大宇宙一つにあたりますから、こっちの大宇宙から別の大宇宙まで朝食前に

飛行するのです。こういう記述をみますと、時間論も空間論も、大乗仏教のものをそのまま受けついでいることが明らかでありましょう。

第二の項目です。煩悩というものがあって、その煩悩を断じつつさとりをめざすのが仏教だと語りました。煩悩は八万四千もあって、三阿僧祇劫という、数えられない、イメージできないほど長い年限をかけてやっと断ずることができるもの。こう教えながら、「煩悩即菩提」といった観念が、大乗仏教の後期には出てくるのだ、とも申しました。

では、浄土真宗ではこれをどのように受け止めているでしょう。そのものズバリ、親鸞聖人の書かれた「正信偈」を見ますと、「不断煩悩得涅槃」とあります。「煩悩を断じて涅槃を得る」ではなくして、「煩悩を断ぜずして涅槃を得る」という表現ですね。煩悩があるからこそ私たちはさとりが得られるのだという、この観念で浄土教は成り立っているのですから、大乗仏教の「煩悩即菩提」の教理を真宗も受けついでいるようです。

『高僧和讃』の一首も示しておきましょう。「本願円頓一乗は　逆悪摂すと信知して　煩悩・菩提体無二と　すみやかにとくさとらしむ」（『註釈版聖典』五八四頁）とあります。煩悩と菩提とは、体は無二（同体）である。あらゆるものの存在の根本にある、決して変わらない本質というかさとりの中心というか、そういうものを考えてみると、表面がどんなであったにしても、すべて外側の飾りを取り去って本体を見つめ直してみれば、あらゆるものに共通する本体（これを法性というのですが）があるという捉え方です。煩悩の人間も、仏も、その本質は一緒だという理解です。煩悩と菩提と体は無二、二つではない、同じものだ。こういうふうに受け取ることが、和讃に説かれています。さらには、「罪障功徳の体となる　こほりとみづのごとくにて　こほりおほきにみづおほし　さ

はりおほきに徳おほし」（同五八五頁）ともあります。一歩進めて、煩悩の多いことが功徳の多さにつながる、煩悩の多いことはさとりの妨げにはならず、かえってすみやかなるさとりの獲得につながる、とまで述べられています。

大学生になるまで、お寺なんか絶対に継ぐものか、と思っていました。が、「不断煩悩得涅槃」というのは何となく性に合っていたようです。一所懸命努力して立派になるという観念は、どうも私にはついてゆけないな、とも考えていました。蓮は、汚れた泥の田んぼの中にきれいな華を咲かす、というような観念が頭に染み込んでいたようです。「不断煩悩得涅槃」といえば、すぐ理解できる。「さはりおほきに徳おほし」というのは、勝手な自己流の解釈かもしれませんが、何か素直に受け取ることができるものでした。

いずれにしても、浄土真宗は、煩悩が沢山あり捨てられないのが人間で、「だから駄目だ」ではなくして、そういう劣った人間であるからこそ、さとりはすぐ近くにある、あるいは阿弥陀如来の救いが確実に恵まれるのであると考えるわけです。いうまでもなく、大乗仏教の教えが生きて受けつがれています。

三番目は、縁起説という、あらゆるものの因縁を考えてゆくという仏教の捉え方です。

先ほど紹介いたしました本願寺のパンフレット『ごえん』の縁起についての表現を、どうぞお読みください。またb．にはご本典の「総序」の文を出していますが、「業縁（ごうえん）」、「縁」、「因」などという言葉が使われていて、あらゆるものが因果の道理に基づいていることが説かれています。さらに、「さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし」という『歎異抄』第一三条の言葉も示しておきました。

人間というものは、立派な人、煩悩が多くて駄目な人などと決まっているのではなくして、そういう縁（条件）

があれば、「いかなるふるまひもすべ」きものです。お金に困って、人の命を取るようなニュースが、時々流れます。そのとき、私たちは「あんなことをして、何とひどい」と思いがちですけれど、自分だって、状況がそうなれば人の命を奪わないという保証はない。話してまいりましたように、「絶対この人は善い人」、「悪い人」と決まっているわけではないので、状況次第では、誰でもがそうなる、そうした行動をする可能性を持っているのです。

もう亡くなってしまいましたが、私の友達で、皆さんもよく知っている人がいました。その友人と二人で、こんな話をしたことがあります。生態での臓器移植は、臓器の提供者と受ける人がいて、提供者の名前は、一応、表面上は隠されています。しかし、いつの頃、どこで移植を受けたかを調べれば、誰から臓器を提供されたか、誰に与えたかは見当がつきます。例えば、あと二・三年の寿命の人が、心臓移植で新しい命を得たとします。そのときには、かけ替えのない命をいただいて、その命を無駄にしない人生を生きたいと決心するはずです。けれども、人生は長い。人間は、罪悪深重（ざいあくじんじゅう）の凡夫、煩悩具足（ぐそく）の存在ですから、いつまでもその決心が続く保証はないのです。「世の中、社会のために命を捧げて生きたい」と決心した人も、何十年か経って、状況次第では人の命を奪うこともあり得る。そういう場合、今申したように提供者も受ける人の氏名も判明していたとして、「お前は、俺の大事な息子、脳死した息子の命を受けながら、他人の命を奪うとは何事だ。こんなアホな人間に心臓を与えた覚えはないから、返せ」と、そういう請求が提供者の父からなされる。こういうことも、これからは起こり得るという話です。

私たちがこうした話をするときは大抵飲んでいましたから、「煩悩の人間がちょっとやそっとで仏さんになるわけじゃなし、生きてりゃ人の命も奪うし、他人の財産も奪うだろう。そのとき、命を返せっていわれたって返せるわけはないよ」などということで話は終わってしまうのですが、こういうことがいくらでもあり得るということです。

『歎異抄』なら、これを「さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし」というのでしょう。偶然でそうなるとかではなくして、状況がそうなったならばということです。したがって、本性としてあることがらが決まっているのではないという教えがここにもうかがえるのですが、『歎異抄』第一三条にはまた、「わがこころのよくてころさぬにはあらず」という言葉もあります。大岡昇平という作家が『俘虜記』という作品に書いています。フィリピンでジャングルをさまよっていて、アメリカ軍兵士と出会ったとき、どうして鉄砲を撃たなかったのか。敵の兵士だって、日本兵の姿を見たら、すぐさまダダダダっと自動小銃を発砲してくるはずなのに、なぜ引き金を引かなかったのか。「人の命を奪ってはならぬ。人間の命は地球よりも重いと考えたから、撃たなかったのか」と、大岡昇平は考え、また、「そんな心はなかった。でも、それにしてもなぜ敵兵を殺さなかったのか」と思考してゆくのです。

そして、結論的にゆき着いたところが、さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし、ということでありましょう。状況がそうならなければやらないし、条件さえあれば、人殺しでも強盗でもする、これが人間の本質で、無自性・空・縁起で成り立っている人間ということが示されている、と申せましょう。

次の細項目をご覧ください。「名号正定業」「信心正因」という句を示しておきました。ともに真宗の大事な教えを語る言葉です。阿弥陀如来のご本願のはたらきが、そのままお名号になって私に与えられる。お名号の「必ずたすける。わが名を称えよ」という呼びかけを信じて、ご本願そのままを受納したところが信心です。すなわち、「我を信じよ。必ずたすける」という弥陀のお心・功徳が、名号（南無阿弥陀仏）の形で与えられ、それを受け入れて、「必ずたすかる、おまかせします」と、疑いなく信じて本願にまかせる心が開けきった状態を語っています。こういう名号が、浄土往生のための正しき業因（正定業）である、この信心こそ、私の往生を決定せしめるただ一

つの正しい因である、というのが先の二句の意味で、同一の内容を示しています。

阿弥陀如来のご本願という特別な概念が入ってきてはいますが、「名号正定業」「信心正因」、「業縁」などという言葉で、縁起という観念が示されています。仏教では、偶然を認めません。どんなものも、ひとりでに、知らないときに勝手にそうなってゆくなどとは考えないのです。ものごとは、あらゆることに原因がはっきりしているし、そうなさしめる条件がはっきりしている。こういう思想を採用するのが仏教です。それが縁起説であるし、浄土真宗も確かにそれを受けているということです。

あらゆるものはこのように縁起で成り立っているのですけれども、ここで真宗的に申せば、必ずしもそうばかりは考えられないということです。「不断煩悩得涅槃」の句をもう一度思い起こしてください。煩悩を断じたからこそ涅槃を得るというのが縁起説の考えだとすると、これは、「煩悩を断ぜずして」とあるのですから、常識であり得ないことが生じています。煩悩の障害などものともしない阿弥陀仏の救い、本願力のはたらきをいうのが浄土真宗の大きな特徴なのです。『歎異抄』第二条をご覧になれば、こういう言葉があります。「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定(いちじょう)すみかぞかし」、私たちはみな、どのような修行・実践もできる身ではなくして、煩悩具足の凡夫といわねばならないから、地獄こそが行くべき世界として定まっている、こういうご文です。しかしながら、その第二条の終わりがどうなっているかといえば、「ゆえに、あなた方は地獄に生まれる」という結論にはなっていない。阿弥陀仏の本願力によって、いづれの行もおよびがたき身ではあるけれども、お浄土に生まれさせていただける、とあるのです。業縁を超越する阿弥陀の救い。縁起で成り立つ世界ではあるが、縁起の、地獄に堕ちるべき鎖を断ち切ってくれる作用、阿弥陀如来のはたらきが考えられてくるということです。

仏教的に分かりやすく、力まないでいえば、こういうことです。仏教では「自業自得(じごうじとく)」といいます。自分がした

行いは、必ず私に報いがある。善い行為をすれば、よい果報がある。悪行には苦果の報がある、ということはよく知られています。中国人は、「積善の家には必ず余慶あり、積不善の家には必ず余殃あり」（易経）と、善悪の果報を家単位で考えていますが、仏教にはそういう考えはなくて、自業自得で、行為の報いの受け手は自分一人です。ともかく、こうして罪悪深重の凡夫である私たちは、悪いことばかりをしている存在であるから、地獄しか行くべき世界はないというのが、『歎異抄』第二条前半の意見なわけです。それなのに、なにゆえお浄土に行けるかといえば、阿弥陀如来にそういう人間を必ず助けるというご本願があって、お名号というかたちで私にはたらきかけているからです。地獄必定の者が浄土に生まれてゆくというのは、縁起の道理を阿弥陀仏の本願力が断ち切ることができる、という論理です。縁起説を受けつぎつつ、それを超える浄土真宗の教えの特徴を銘記してください。

それでは、第四番目の項目です。浄土真宗では、「正定聚」「不退転」という、決してさとりから後戻りしない境地というものを強調します。それで、「現生正定聚」といい、また「平生業成」というのです。ゆっくり話す時間がありませんが、阿弥陀如来から信心をたまわって、阿弥陀如来にすべてをまかせる心ができた人を、正定聚（正しく浄土往生が定まったなかま）と称します。現生正定聚というのは、信心を得た瞬間に、今この生きている現在の命（これが現生ということ）にあるときに、正定聚の位に就くということです。平生というのは、普段のときという意味ですから、信心を得た、その普段のときに即座に浄土往生すべき業が完成する、ということです。したがって、この二つの句は、まるきり同じ内容を指しています。

平安時代や鎌倉時代の仏教では、「臨終業成」と語られています。普段のときではなくして、臨終、死ぬ瞬間になれば、そのときは自分の命がかかっていますので、命をかけて必死の思いで「阿弥陀如来、どうぞお浄土に生

まれさせてください」と願う。その命のかかった願い、臨終の強い思いこそが大切で、こうしてこそ浄土往生の業が定まる、すなわち、臨終こそが業因の定まるときだとするものです。ですから、亡くなる臨終のときには、五色の糸で阿弥陀如来の像と死にゆく者の手とを結んで、「臨終正念」（臨終に阿弥陀仏に往生を願う正しい心を保つ）ことが求められたのです。これに対して、浄土真宗は、いつでも構わぬ、普段、平生に、阿弥陀如来から信心をいただいたとき、往生の業は完成するのであるとして、現生正定聚等と考えたのです。

『大往生』というタイトルの本がありましたが、「大往生」とは一体どんな往生をいうのでしょう。長寿を保って畳の上で安らかに死ねたら大往生で、交通事故で内臓が飛び出て死んだり、街で不慮の事件に遭ったりして若くして亡くなったらそうはいわないのでしょうか。また、臨終正念ということでは、こういう突然の死ばかりでなく、認知症による往生も、現代では非常に多くの人がかかり大きな社会問題になっていますが、正念を成し得ませんから、これも大往生とはいえないのでしょうか。

火山の爆発、交通事故、地震災害や水害。私たちが遭遇して死に至らしめられることはいくらでもあります。それから、長生きしても、認知症を患って死ぬ可能性はとても高いものがあります。臨終には正念をと願っても、それがかなわないことが多いことは目に見えています。このように考えてみましたら、この「現生正定聚」というのは、とても素晴らしい。何回も繰り返し説明してまいりましたように、三阿僧祇劫というとてつもない長い修行期間と段階があって、その三分の二ほどが経過したときはじめて得られる正定聚。そういう境地が、この現生で普段の中で獲得できるのです。まさに、すべての衆生に浄土往生という救いを与えたいという阿弥陀仏の教えの成果であり、浄土真宗の教義の中心的な部分なのです。

b. の細目に、「便同弥勒」と出しておきました。すなわち弥勒に同じ、と訓じます。「次如弥勒」は、次いで弥

勒のごとし、と読みます。弥勒菩薩は、お釈迦さんの後継者というべき菩薩さんで、釈迦如来が涅槃に入られて五十六億七千万年ののち、この娑婆世界に登場してきてさとりを開く存在です。あと一度だけこの人間世界に生を受けたら、次は仏陀の位に就くという、菩薩の最高位（これを一生補処（いっしょうふしょ）といいます）にあります。その三阿僧祇劫近い修行を終えて、あとは仏陀のさとりを得るだけという存在の弥勒菩薩、それとほとんど同じというのが「便同弥勒」とか「次如弥勒」ということ。私たち浄土真宗の信者が、阿弥陀如来から回向された信心をいただいたなら、たちどころに正定聚になるわけですが、それは弥勒にほとんど等しいというのです。信心を得た人は、どのような死に方をしようとも、必ずお浄土に生まれることができるから、そういうのですが、浄土真宗の驚天動地の教説、親鸞聖人が示した大乗仏教の菩薩思想の究極といえましょう。

何とか第五項目にたどり着きました。菩薩の基本理念として、本日後半の初めに申しましたように、利他の精神、利他行の実践があります。ただ、浄土真宗においては、残念ながら、私たち念仏の行者の側には、あまり菩薩の自覚はないように思います。法蔵菩薩に救われる、いや、法蔵菩薩の成就した阿弥陀如来によって救済されるものとして、菩薩の理念、利他の心を受けついでいるのは、救いの側、法蔵菩薩や阿弥陀如来の方に多く語られています。それをa．の項目に示しました。

私は、繰り返しになりますが、不断煩悩得涅槃だとか、煩悩具足、罪悪深重の凡夫という考え方を、嬉しく真実を示すものと受け取っています。口では偉そうなことを述べても、心の中は何を考えているか分からない、それが人間です。しかし、だからといって、世の中を生きてゆくのに、自分中心の考えだけで何でも処するというのは上等な人間ではない、と思います。限定的な利他行しかできませんが、それでも少しは他のためを思って生きるのが

人間でありましょう。

『歎異抄』の第四条に、こういう言葉を使って解説しています。「聖道の慈悲」と「浄土の慈悲」。聖道門といわれる自力で修行しさとりを得ようとする法門の慈悲と、阿弥陀の本願にまかせて浄土往生を願う浄土門の慈悲ということです。こういう二種の慈悲の心を比較して、浄土の慈悲の方が圧倒的にすぐれているといいます。聖道の慈悲は、「おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし」というべく、「いかにいとほし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがた」いものだという。確かにこのとおりだと私も思います。だからといって、他人が困っているのを見て、何もしないで見過ごすというのは、人間の正しい生き方とは申せません。

京都女子大学の名誉教授でもあり、現在、本願寺派の勧学寮頭の重責にある徳永一道（徳永道雄）先生は、こうおっしゃっています。「罪悪深重の凡夫で阿弥陀如来に救われる存在ではあるけれど、念仏者として救いを喜ぶ身になれば、やはり、完全に成し遂げることはできないかも知れないが、他人のためにつくして少しは社会的に有意義に生きた方がいいし、本当の意味での利他行ではないにしても、それはやるべきだし、やることが大切ではないか」と。やったからといって浄土が近くなるわけではない。いくら義捐金を出したからといって、阿弥陀如来の救済が確実になるわけでもない。また、浄土願生者として完全無欠な利他行をすることは不可能ではあるが、少しでも利他的活動を実践することは重要です。そういう意味をこめて、b. とc. の文を出しておきました。丁寧に解説する余裕はありませんが、お帰りになってから、ゆっくりと味わっていただきますよう。

その根拠となると思われるものが、親鸞聖人のお手紙です（『註釈版聖典』七八四頁）。「わが身の往生一定とおぼしめさんひとは」、阿弥陀如来より信心をいただいて自分の往生が定まったと考えられる人は、「御念仏こころにいれて申して、世のなか安穏なれ、仏法ひろまれとおぼしめすべし」、心をこめて念仏し、世の中が安穏であるよ

うに、仏法が広まるようにと思え、とあります。この「世のなか安穏なれ、仏法ひろまれ」の句に、念仏者の利他的な生き方が示唆されています。私たちは、結局は、阿弥陀如来の利他のはたらきに救われる以外には、浄土往生はかなわないけれども、念仏者として生きるときには、「世のなか安穏なれ」と思いつつ生きるべきでしょう。やはり、東日本大震災があれば義捐金の少しくらいは出すべきであるし、チャリティーの催しがあったとすれば、それに協力することが必要であります。

次に進みます。極楽世界があるのは、西の方、十万億の国土を過ぎて行ったところという。すなわち、そこが極楽という阿弥陀仏の三千大千世界のありかである。しかし、世界観がさらに広がって、三千大千世界ということではなしに、広大無辺の浄土というのが考えられてきます。レジュメにあった「娑婆即浄土」という句と、第二部第六項のc．の「仏土の所在」というところを見てください。極楽浄土は、「去此西方十万億刹」、ここを去ること十万億刹という表現が『大経』にあるかと思うと、『観経』には、「去此不遠」、ここを去ること遠からずと出ています。これをどう理解するかです。ここを去ること十万億刹といったら、無限大といってもよいほど遠いです。一方で、『観経』は、ここを去ること遠からずと逆のことをいっています。煩悩即菩提、娑婆即浄土といった即の論理でしょうか。非常に遠い距離が、すなわち即にここに現出するという考え方がここにも見られます。

西方十万億の国土を過ぎてといったら、先ほどの梶山雄一先生は、「西の方へずーっと行ってみよ。地球の上で西の方へ行くとすると、ぐるぐる回って元へ戻ってくる。ロケットで西の方の宇宙に飛び出すとするなら、あるかね浄土が」とおっしゃっていたのを思い出します。「だから、お浄土はない」と梶山先生がいわれたわけではないでしょう。方角とか距離ではないという意味だと思います。浄土は方角とか距離ではないというときに、遠いとおい浄土に阿弥陀如来がいて、「おまえを救う、間違いなく救うぞ」と、ドでかい声で怒鳴っているというのではな

くして、私のところにまで出向いてこられて、ここで現にはたらいていることを意味しているのでありましょう。

私がいうのではありません。親鸞聖人がそう考えていらっしゃる。レジュメの一番最後、お名号、「南無阿弥陀仏」というのは、ただに、阿弥陀仏の名前ではなくて、阿弥陀如来がこの私に呼びかけてくださっている言葉である。如来のあらゆる修行の功徳、菩薩時代の功徳をそれにこめて、この功徳を回し向けつつ、現にはたらいている姿であるという。伝統的な解釈によって訳すとすれば、「南無阿弥陀仏」の六字は、「阿弥陀さん、どうぞおたすけください」ではなくして、阿弥陀如来の方から、「われを信じ、わが名を称えよ。必ずたすける」という呼び声であるという。そう呼びかけ続けて、「南無阿弥陀仏、ナモアミダブツ」と現にはたらいているのが弥陀そのものであるという解釈です。

ともかく、こういうところに真の仏の利他の活動もあるし、回向の精神も受けつがれていることが明らかであるし、真宗が大乗仏教のエッセンスを間違いなく受けていることが認識できます。

最後の最後に、「還相（げんそう）の菩薩」という項目です。浄土に往生したらどうなるか。親鸞聖人はこういっています。「往生したなら、即座にさとりを開いて、すなわち成仏して、仏になった途端、この娑婆世界に戻ってきて、人々のためにつくす活動をする」と。この、浄土でさとった後、娑婆に還り来て人々のためにつくす菩薩が、還相の菩薩です。

いいですね、「げんそう」と、正しく読んでくださいよ。浄土は極楽だからといって、そこで楽しみにふけるところではありません。少なくとも、親鸞聖人の思想にはそんな考えはみじんもない。さとりを得たなら、苦悩の娑婆世界に立ち戻って、衆生の救済活動に従事する。これが成仏、仏としてのさとりを開くということの内実であるというのです。ここにはじめて、大乗仏教のいう真の利他の活動ができる、というわけです。

もっとも、この還相の菩薩は、阿弥陀仏の本願のはたらきによって回し向けられた功徳であって、そのエネルギー源は、阿弥陀仏の本願力（他力）にあるとするのが聖人の考えです。これを「還相回向」といいますが、このあり方にも、大乗仏教の利他の精神と回向の観念とが十二分に見て取れます。

聞き取りにくい散漫な話となりました。が、私としましては、大乗仏教の重要な考えと、それを正しく受けついだ真宗教義という内容で、予定していたことがらはほぼ話し終えたと考えています。予定時間もすでに超過しておりますので、この辺で私の講演を終えたいと存じます。

ご清聴を感謝いたします。ありがとうございました。

〈キーワード〉

阿僧祇劫　煩悩即菩提　無自性　菩提薩埵　利他行